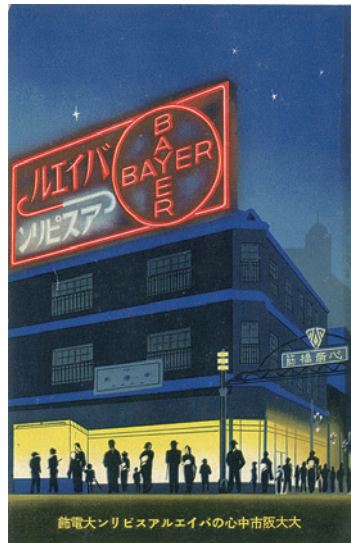


# 薬

# Art gallery

第四  
展示室

## 絵葉書 その2



前回に引き続き絵葉書を取り上げますが、今回は医療用医薬品の絵葉書です。売薬系の絵葉書と同様に縦のデザインが圧倒的に多く、また現代ほど医薬分業が進んでいなかった時代なので、多くは開業医や勤務医、病院内の薬局の薬剤師向けのダイレクトメールとして使われていたようです。

現在、製薬メーカーのMR (Medical Representative) Ⅱ 医薬情報担当者) は全国に約6万3千人おりますが、MRが制度として確立される以前は、薬の情報を伝達するという

よりもセールスを主体としたプロパーと呼ばれる時代がありました。医療用医薬品の売り上げは、薬の効き目や品質が優秀であることは当然ながら、プロパー諸氏の販売能力の双肩にかかっていたとも言っても言い過ぎではないように思います。そして、今回ご紹介する医療用医薬品の絵葉書も、社名や製品名の周知とプロパー活動の補完という役割を果たしていたのでしょう。

戦後の医学界は米国医学が主流となりましたが、戦前の医学はというとドイツ医学の色彩が濃く、医学関係の用語やカルテなどもドイツ(独逸)語で書かれたり話されたりしました。薬学の世界にもその名残りがあり、筆者も薬科大学時代はドイツ語を学びましたし、今でも食前を 'Vorde'、食後を 'Nache' と書く医師もおります。

そのような背景もあり、戦前の超一流の製薬メーカーといえば、『ドイツの『バイエル社』であり、絶対的な信頼を寄せる医療者が多かったように思います。そんな『独逸バイエル社』の絵葉書は、医学界を牽引してきた堂々とした雰囲気を感じられるたいへん垢抜けた逸品です。他のメーカーも創意を凝らしたデザインで売薬系の絵葉書に勝るとも劣らぬバラエティに富んだ作品が多く残されています。

